

3 遊びの中の学びを捉え直すために

福井大学連合教職大学院 准教授 岸野 麻衣

(1) 事例を書くことの意味と方法

遊びの中の学びを捉え直すためには、エピソードを事例として書き、語り合っただけで検討することが欠かせません。では、どのように進めていけばよいのでしょうか。

ア 事例を書く前に：読むこと・見て語ること

まずはこの冊子に収録されている事例を読むことから始めましょう。読んでみてどんな感想をもちましたか。このように書けるだろうかと不安になったのでしょうか。すごいなと感心したのでしょうか。それはきっと、遊びの中での子どもの姿を丁寧に捉えているからではないのでしょうか。子ども一人一人の思いや考え、培われていった学びや育ち、それを支える保育者の思いや考え……。これらを書くためには、まずは遊びの場面を複数の保育者と一緒に見て、子どもの思いや考え、学びや育ちを語り合うことから始めるとよいでしょう。他者と一緒に語ってみると、案外いろいろなことが出てくるはずです。その際、幼児期に育みたい資質・能力や幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿について、幼稚園教育要領等で改めて確認しておく、視点として役立ちます。

イ 事例を書くことの意味：遊びを捉え直す

遊びの場面を見たり他の保育者が書いた事例を読んだりして語り合ったように、自分の実践についても書いてみることです。「よい事例を書くこと」が目的ではなく、遊びを捉え返し、自分の保育を見直すことが目的ですから、構えることはありません。

遊びの中の学びを捉え直し専門職として力量を形成していく上で、なぜ事例を書くことが大事なのか、考えてみましょう。

何気ない遊びを丁寧に見ていくと、学びがたくさん見えてくるはずです。でも、忙しい日々の生活では、意外と「楽しくてよかったね」と流れていってしまうものでもあります。子どもたちにとって、何がどうよかったのか、どんな育ちや学びがあったのか、言葉にしていくことが大切です。しかも、その場面を見ていない人にも共有できるように伝えることです。この「捉える力」「語る力」が、保育をよりよくすることにも、保護者や小学校の先生とのやりとりにも大事になります。書いてみると、子どもたちの学びが見えてきて、次にどんなふうに遊びを展開していくとよいか、展望も見えてくることでしょう。

自分で事例を書いてみたら、園内で語り合っただけを勧めます。園内で記録を検討し合えば、きっと保育をよくするヒントがたくさん得られ、また同僚の先生たちとの共有財産にもなります。それをそのまま保護者や小学校の先生に渡してもよいかもしれませんが。書いたもののよさは、語られたことと異なり、時間や空間を越えて残すことができ、さまざまな人たちと共有することができます。園を越えて、他の園や学校の先生たちと事例を検討することで、自分の園では当たり前になっているようなことがそうではないことに気付き、意味を問い直すことにもつながります。

ウ どのように書くか：日々の記録を生かして

まずは、どんな場面を取り上げるかが大事になります。保育の中で感じる「すごいな」「よかったな」「どうだったかな」という実践感覚が頼りになります。そこではおそらく、子どもが興味をもって夢中になり、いろいろなことを感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったり、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりしているからです。

そのような場面を、保育中に可能な範囲で写真を撮っておいたり、保育後に簡単でよいのでメモを残しておいたりしてみましょう。自分のやりやすいように、日々の記録や週の記録をうまく残していくとよいでしょう。

事例の記述にあたっては、まずは「事例の背景」が必要です。どうしてこの事例を取り上げようと思ったのか、これまでの過程で子どもたちがどう育ってきているのか、保育がどう展開してきているのかなどです。

次に、保育の中で起きた事実を「具体的なプロセス」として書いていきます。保育者としてどんなねらいでどんな環境構成をしたのか、子どもたちがどんな言葉・動きで遊びを展開していったのか、見ていない人にも状況が浮かぶように書くといよいでしょう。

そして、「考察」を書きます。そのとき保育者として、子どもたちをどういう状態と捉え、関わりにおいてどんなことを考えていたのか、子どもの姿・保育者の関わりについて今思うとどうか、「すごいな」「学びだな」「課題だな」と思うのはどういう部分か、どうしてそう思うのか、どうしてそんなふうになったと思うか、これからどうしていくといよいと思うかなどを書いていくといよいでしょう。

エ 考察の重要性：見直し次に生かす

考察を書くというのは難しく感じる人もいるかもしれません。しかし、考察を書くことは、何気なく取り上げた子どもの姿について、その意味を考え直すことになり、大変重要です。たとえば「夢中になっていていいなと思った」というとき、「子どもが一生懸命だった」「自分たちで工夫していた」「アイデアがたくさん出た」「もっとよくしようと思いが入れが感じられた」など、いろいろな可能性があります。自分は、どういうところを「学び」として捉えて大事にしたのか、そのためにどう援助し、環境構成を行ったのか、考えることにつながります。

考察を考えることは、次の保育に生かすことにもなります。考察で見えてきたようなよさをさらに伸ばすにはどうしたらよいか、課題に思えるところについてどうしていったらよいか、事例で取り上げた場面以外はどうだろうか、「遊び」以外の場面にもそういう姿はあるだろうかなど、今後の保育を考え直すことになるのです。

そして、子ども観・保育観を見直すことにもなります。自分は子どものどういう姿を大事にしているのか、保育者としてどうあるべきと考えているのか。過去の事例をあとで読むと、違う見方や考察ができるようになっていくかもしれません。以前なら深く考えないような子どもの姿を今は丁寧に語れるようになっていくかもしれません。自分の子どもを捉える見方・理解の深化という自分の変容に気付くことにもつながるのです。

(2) 事例を書く視点：遊びの中の学びのサイクル

ア 遊びの中の学びのサイクル

遊びの中で学びが展開していくとき、多くの場合、図のようなサイクルがあります。事例を書くとき（書いてみてから）、どのような展開があったか、サイクルの視点でとらえ直してみるのも有効です。



まずは「発意」です。発意とは、子どもの心が動き、感動したり不思議に思ったり疑問をもったりして、やってみようという意欲や意志が生まれることです。子ども自身の心が動かなければ、何か活動していてもそれはやらされているにすぎません。いかに子どもの思いや考えに寄り添って環境構成をするかが重要です。

発意が生まれると、子どもたちは「どうしたらいいかな?」と、子どもなりに計画を練り「構想」します。それはやがて、「これを使うといいな」「こうやってやってみるといいかも」と具体的なものや手立てを伴い、「構築」につながっていきます。ここでは、子どもたちが自由な発想で構想・構築できるような環境構成や援助が重要になります。どんな場所でどんな素材をどんなふうに扱うことができるようにするかが問われます。

子どもたちは自分なりに見通しがもてると「遂行・表現」して実際にやってみます。やってみると、たいてい、「見て見て! こうなったよ」「あれ、うまくいかない! どうしてだろう」と自分のしたことを振り返り、「省察」するものです。

そして、それは、「次はもっとこれもしたい」「今度はこうしてみたらうまくいくかも」と「次の発意」へつながっていきます。子どもが自分の行為や作品を見せたとき、どんな言葉がけをするか、それらをどんなふうに他の子どもたちと共有するかが大事になってきます。こうした援助や環境構成次第で、その遊びはそれっきりになってしまったり、さらに深まっていったりします。

イ 子どもの姿を見直す視点として

ともすると、「発意」が保育者のもので、「構想」「構築」も保育者の考えたもので、子どもたちはただ言われた通りに指示に従って「遂行・表現」しているだけになってしまうこともあります。子どもたちが自らの「発意」をもっているときこそ、「学びに向かう力」が育まれ、子どもたちが自ら「構想」「構築」して試行錯誤しているときこそ、試し、工夫し、考え、表現し（思考力・判断力・表現力の基礎）、様々に感じ、気付き、分かり、できるようになっていくものです（知識・技能の基礎）。その意味で、自分で書いた遊びの事例においては、子どもたちがどのようなサイクルで学んでいたか、考えてみるとよいでしょう。

もちろん、年齢の小さいうちは、構想や構築に分かれず、とりあえずいろいろな道具を試してやってみるということや、計画するより思いついたことをとにかくやってみるということもあるでしょう。年齢が上がるにつれて、子どもたちで相談して計画して進めるようになっていきます。

また、図の背景に小さな螺旋がぐるぐるとかかれているように、この螺旋は捉え方によっては小さなサイクルにも大きなサイクルにもなります。細かく見れば、一つ一つの場面をサイクルとして捉えることもできますし、一方で大まかに見れば、遊び全体を一つのサイクルとして捉えることもできます。

遊びをこの図にあてはめることが目的ではありません。あくまでも視点として、子どもたちがどんな発意をもち、どれだけ構想しているだろうか、省察が次の発意につながっているだろうかなど、子どもたちの学びを捉え、考え直すために使ってみてください。

ウ 援助や環境構成を見直す視点として

このサイクルは、保育者の援助や環境構成を見直すための視点にもなります。

遊びの背景では、保育者もさまざまに感情や思考が働きます。子どもの言動に目を向けて、思いや考えのプロセスを追いかけて見取り、それに対して保育者としてどう捉え、どうすべきかを考え、判断し、関わっていくと思います。たとえば「大丈夫かな?」「がんばれ!」などの感情や、「これまでのあの経験が今に生きているんだな」などの育ちや学びについての思考も生じるかもしれません。環境構成の工夫や、「声かけをした」「見守った」などの援助の裏側には、こうした見取りや願いがあるはずです。

遊びが展開していくサイクルの中で、子どもをどう見取っていたのか、それぞれの局面でどんな環境構成や援助をしていたのか、これからの展開の中でどうしていくとよいのかなど、考えることができます。

エ より長いスパンでとらえる

遊びが展開していくと、「省察」が次の「発意」につながり、「もっとこうしたい、それにはどうしよう、こうしてみよう、やってみたらこうだったぞ、さらに次はもっとこうしてみよう…」と、サイクルは次々につながっていきます。つながるにつれて、体験の多様性や関連性も広がり、子どもと対象との関わりや子どもたち同士の関わりがより深いものになっていきます。

1日のエピソードだけでなく、このように長いスパンで展開を捉えると、遊びの発展や子どもの育ちのつながりが見えてきます。年齢が上がるほど、今日の経験が明日に、今週の遊びが来週に、と時間を越えて遊びをつないでいくことができます。低年齢の場合にはそうはいきませんから、小さなサイクルのつながりを大事にするとよいでしょう。

なお、無理に保育者が遊びをつないで引き延ばしていくものではありません。子どもの思いや考えのつながりを大事にしながら、保育者としての願いを合わせて、遊びの流れを創っていくこととなります。年齢が上がるにつれて、子どもと一緒にどうしようか相談しながら進めていくこともできるようになるでしょう。

より長いスパンで事例を書くといっても、1月はこんなことをしました、2月はこうで…というような大まかなものではありません。まずは日々の記録を大事にし、そのつながりを見直してみるのが大事です。そうすると、遊びが発展する節目になるところや一区切りして次の展開になるところが見えてきます。それを踏まえて、場面ごとの子どもの姿を丁寧に記述しつつ、場面間のつながりを考えて、長い歩みを記述してみることです。それにより、子どもたちの思いや考えがどのような道筋を経て変わっていったのか、辿ることができます。長いスパンで子どもの学びや育ち、保育者の見取りや援助、環境構成を考察していくとよいでしょう。

(3) 事例を持ち寄る：ファシリテーターの役割

ア 協働探究の場をつくる

事例をもち寄り、語り合うにあたっては、ファシリテーターの役割が極めて重要です。ファシリテーターとは、「ファシリテート」する人です。ファシリテートとは、「促進する」「引き出す」というような意味です。園内外でさまざまな先生たちの学びを引き出し促す役割と捉えるとよいでしょう。

その際気を付けたいのが、「教え導く役割」「指導助言者」ではないということです。他の先生の語りを聴いていると、経験を積んだ人であればあるほど、子どもの姿やそこでの保育者の役割について様々な角度から多くを想像でき、これまでの経験に照らして、「そういうときの子どもはこういう思いなのだ」「そういうときにはこうするとよいのだ」ということが見えてしまうものです。気付いたことはつい教えてあげたくなります。しかし、それほど経験のない人にとっては、いろいろと言われたところで、ピンとくるとは限りません。言葉としては理解できても、実感をもって理解することは難しいかもしれません。

まずは、語り手の話を丁寧に聴き、その人の思考を探ることです。また、一緒に聴いている聴き手たちの反応も見えておくとよいでしょう。ファシリテーターの経験から、このことについては掘り下げるとよいのではないかということについて、聴き手の先生たちにもどう思うか尋ねながら、みんなで一緒に考え、学び合う場にしていくことが大事です。保育に「正解」はありません。経験のある人から見ると「こうするとよい」ということが見えても、その場のその状況の中では、それすら正解とは限りません。ファシリテーターも含めて、協働して、よりよい保育に向けて探究していく姿勢が重要なのです。

イ 協働探究を深め広げる

語る事例の内容だけでなく、事例の書き方についても協働で探究していけるとよいでしょう。日々の記録をどう書いていくとよいのか、そこから遊びの展開を捉えるためにどういうふうに記録を集積していくとよいのか、それぞれの園の中でどうやって振り返り共有する場をつくるとよいのかなど、これもまた正解のないことです。それぞれの園の状況の中で何ができるのか、知恵を寄せ合って考えていくことが大事です。記録の在り方を検討することは、保育そのものの改善にもつながっていくはずで

そうやって園の中や園を越えた協働探究の輪は保護者や小学校にも広げていけるとよいでしょう。事例を書いて見えてきたことを踏まえて、ポスターにまとめて掲示したり、生活発表会等の行事の際に子どもの学びや育ちをスライドで見せながら語ったりする園もあると思います。日ごろの保護者会等で、園での学びや育ちについて写真を見せながらエピソードとして語ることも意味が大きいのではないかと思います。幼児期の必要な経験や遊びの中の学びや育ちについて保護者とも共有できると、行事の在り方を見直すことが可能になったり、保護者の参画をより適切に促すことが可能になったりすることでしょう。

協働探究の輪を小学校へ広げていくことも重要です。たとえば夏に小学校から保育参加体験にやってくる時や、公開保育に小学校の先生が参観に来るときなど、書き綴った事例に目を通してから来てもらうのも一つではないかと思います。保育者として園でどんなふうに子どもの学びや育ちを捉えているのか、どんなことを大事にしているのかを分かってもらえると、当日来園したときの見方も変わるのではないかと思います。小学校との連絡協議会や、就学前のタイミングで、年長児の遊びの事例を読んでももらうことも、園での経験や育ちを知ってもらうよい機会です。

また、園から小学校へ参観に行った際も、子どもが指示に従っているかどうかを見るのではなく、一人一人の子どもの言動の機微を丁寧に見取り、授業の中で子どもがどんな思いや考えをもっているように見えるか、園で培ってきた経験が活かされているか、生かすにはどんな環境構成ができるとよいのか、といった視点で参観することを勧めます。可能なら、参観の記録をエピソードとして書き、それをもとに語り合い、共有してみることも有効ではないかと思います。小学校の授業の中で子どもの学びや育ちを支えることについても、幼児教育の視点から見えることを伝え、共有していけると、いっそう子どもの学びや育ちを培うことができます。

事例を書くということには、このようにさまざまな可能性が秘められています。ファシリテーター・コーディネーターになる先生方同士の協働も重要です。知恵を寄せ合い、力を合わせて、福井県の子どもたちの学びや育ちがよりよいものになるよう、支えていければと思います。

おわりに

前回、福井県保幼小接続カリキュラム「学びをつなぐ 希望のバトン カリキュラム -学びに向かう力をはぐくむ-」を策定して以来、福井県では、講座を通して幼児教育と小学校教育の先生方が語り合い、研修を通して、幼稚園・保育所・認定こども園の先生方が「学びに向かう力」を核として同じ方向を向いて学び合ってきました。

語り合うことは、お互いの教育のことを知るきっかけとなり、知ろうとすることは、お互いが分かり合える一歩になります。学び合う方向が同じであれば、今、自分が行っていることを知ってほしくなり、共感してほしくなります。講座や研修を通して、そんな先生方の姿を多く見てきました。

幼稚園教育要領等では、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱から構成される資質・能力を一体的に育むように努めることが示されました。小学校学習指導要領・中学校学習指導要領・高等学校学習指導要領では、資質・能力の三つの柱である「知識及び技能の習得」「思考力、判断力、表現力等の育成」「学びに向かう力、人間性等の涵養」が偏りなく実現されることが求められています。

つまり、同じ子どもたちを育てる立場として、幼稚園・保育所・認定こども園・小学校、さらには、中学校、高等学校の縦のつながりで見通していくことができるようになりました。しかし、現場で枠を超えて進めるためには、先生方の熱意なくしては成しえません。

今回、「-学びに向かう力を発揮する-」ことを目指し、育ちのプロセスが見えるカリキュラムに改訂しました。福井県の子どもたちの未来を見据えて、現場の先生方と共に力を発揮したいと考えています。

最後になりますが、本カリキュラムの改訂にあたり、御指導・御協力をいただきました福井大学連合教職大学院の先生方、福井県幼児教育力向上会議委員の方々、各市町担当課担当者および市町幼児教育アドバイザー・園内リーダーの皆様方に心より感謝申し上げます。



福井県教育庁義務教育課 幼児教育支援グループ
TEL (0776) 20-0732

福井県幼児教育支援センター
TEL (0776) 41-4231 FAX (0776) 41-4232

Eメール
youji-c@pref.fukui.lg.jp

ホームページ
<http://www.pref.fukui.lg.jp/doc/gimu/youjikyoiiku/youjikyoiiku.html>

平成31年3月発行